

『やさしい踏切』

名塚 かずや

○登場人物

もりやま なお

森山 奈緒(28)

ただすくろ

多田 優(29)

仙台市の柏木にある年季の入った碁会所。

白熱灯のオレンジじみた灯りが部屋を照らしている。

細かく傷のついたカウンタートと、何台かの丸机。

時折、電車が走る音と踏切の遮断機の音が聞こえてくる。

入口の近くには覆いをかけた卓上盤や碁笥、チェスクロなどが

纏められていて、まるで引越しの前の様相だ。

虫の鳴く声のする秋の夜。

机を挟む椅子の一方に多田 優は座っている。

店の奥から、森山が一台の卓上盤と碁笥を持ってくる。

森山 これ、うちに残すやつ。

多田 え、立派じゃないですか。

森山 多分、そうでもないですよ。本力ヤとかじゃないし。

多田 そうかな。(碁笥を受け取って)ありがとうございます。

ト、森山は碁盤を挟んで多田の向かいに座る。

森山 握りますか。

多田 はい。

ト、多田と森山は碁笥から石を掴んで盤上に離す。

森山 私白ですね。

多田 先にコミ渡しときます？

森山 じゃあ(ト、黒石六個をアゲハマとして受け取る)。はい。

多田 はい。じゃあ、お願いします。

森山 お願いします。

ト、二人は打ち始める。

二人が打ち始めてしばらくしたところ。

盤面は中盤。隅で実利を稼ぐ白に対し、黒は厚みを築いている。

多田は盤面を見て状況を分析する。

多田 全然足りないな。

森山 え、そうですか。

多田 や、隅でこんな稼がれてて、中央だけで間に合う気がしない。

森山 や、まだわからないじゃないですか。

多田 だって、荒らしてくるでしょ？

森山 まあ、頑張ります。

多田 負けるって。あーもう。考えさせてください。

森山 じゃあ、お茶、入れてきます。

多田 あ、ありがとうございます。

ト、森山は立ち上がり、食器のあるカウンタートに向かう。

ケトルからお湯をとって、急須に汲み蒸らし始める。

森山 手伝ってもらっちゃって、ありがとうございます。今日。

多田 いや、全然。むしろこんな時間になっちゃって。

森山 そこからこうして付き合ってもらってるんで、頭あがらないです。

多田 その割、手加減してくれないですよ。

森山 互角の人に手加減する余裕ないです。

多田 嬉しいけど、やっぱり勝ちたいなあ。

森山 私も。

ト、森山、お茶を入れたカップを渡す。

多田 (受け取って) ありがとう。

森山 熱いから、ずっと持っていない方がいいかも。

多田 わかりました。

ト、多田は傍にカップを置く。

森山は座らず、広くなった店舗の中を見回している。

森山 やー。しかし。2年もよく持ちましたよね我ながら。

多田 え。

森山 ここ。

多田 よくって。だって頑張ってたし。

森山 頑張っていましたよ。私、今自分の事ほめてます。

多田 ……すごい。

森山 ふふ。

今、街中の碁会所、どのくらいあると思います？

多田 ……駅前と。片平とか。

森山 どつちもなくなっちゃいました。

多田 え。

森山 コロナで。

多田 そうなんだ。

森山 そんな中でも頑張ってたなあ。お客さん全然来なかったし、結局ウチも畳んじやうなんですけど。

多田 ……。

森山 あ、でも片平の方は移転して復活したんですよ。大学病院のあたりに。今度からはそっち行きます？

多田 ……行かないかな。怖いし。

森山 常連さんで固まってそうですもんね。

多田 前、別の碁会所行ったら、誰も相手してくれなかったことあつて。

森山 あー。

多田 ここなくなるの、大きいですよやっぱり。

森山 そつかあ。

ト、多田は一手打つ。

森山は音で気が付いて

森山 あ、打ちました？

多田 ここに。

森山 え、めっちゃ踏み込んでくるじゃないですか。

多田 や、こうでもしなきゃ勝てないし。

森山 えー。わくわくしますね。

多田 戦々恐々ですよ。こつちは。

ト、盤面を見ながら次の一手を考える森山。

多田はお茶を飲みながら、片付けた碁盤などを見ている。

多田 明日は、来なくていいんですか？

森山 はい。桜丘教室さん、何人かで軽トラで来るって言うたの。

多田 そつか。全然、来れるんだけど。

森山 や、申し訳ないです。結構早い時間だし。

多田 別に、それは……。

森山 えい(ト、打つ)。

多田 ……うわ。

森山 真つ向勝負で行きましょう。
多田 ですよねえ。おっし。

ト、多田、森山は暫く無言で打ち合う。
何手か打ち進めながら

森山 私、多田さんと打つの、やっぱり好きです。

多田 え？

森山 ふふ。や、あんまりいい言葉が思いつかないんですけど、私と同じくらいの強さで、同じくらいの歳の人って、なかなか打つことないじゃないですか。

多田 確かに。

森山 負けたくないなって思える人と打つって、こんなにいいものなんだなって。楽しいんだなって。思って。思ってたんです。そっか。

ト、多田は少し考えながら、打って

多田 僕もです。

森山 嬉しい。

多田 (何かに気が付いたように)あ。

森山 ん？

多田 なんでもないです。

森山 ……こっちが先かな(ト、打つ)。

多田 (無言で打つ)

森山 (無言で返す)

ト、お互い二手ほど続け、多田の手番に。

多田 ……負けました。

森山 ありがとうございます。

多田 ありがとうございます。うわー。

森山 いや。これ全然、十手前で互角でしたよね。

多田 先にアテてからハネてればなんとかだったかもだけど。このキリを完全に見逃してた。

森山 あー。……ちよつと戻しますけど、この手でこの石抱えてたら二眼出来そうじゃないですか？

多田 確かにそう思ったんですけど、その間にこちらへんに打たれたらどう頑張っても足りなくなるなって思ってた。じゃあ外で眠つくった方がいいかなあつて。

森山 確かに、そっか。

多田 やー、悔しいなあ(ト、片付けようとする)。

森山 あ、崩さないで。

多田 え。

森山 しばらく置いておきたいなって。

多田 え、性格悪くないですか？

森山 だって、ライバルに勝ったって、すごい嬉しいことですよ。

多田 僕、勝つてもそんなことしないですよ。

森山 しばらく多田さんと打てなくなりそうだから、記念に。

多田 わかりました。

ト、森山は笑う。

多田 森山さん、新しい仕事っていつからなんですか？

森山 明後日からです。

多田 え、結構急なんですね。

森山 です。でも、早く働かないとお金やばいから。

多田 碁会所って正直、お金の面だとうだったんですか？

森山 うーん。毎日20人お客さん来てくれるなら、碁会所だけで生活出来たと思います。

多田 20人か。

森山 そもそも父のときから、半分趣味みたいな感じでやってたみたいですし。家賃とかももうかかってないから、今までは何とかやってたんですけど。流石に父にお金かかるよう

になつちやつたので。

多田 お父さん、今どんな感じなんですか？

森山 どんな感じ。どんな感じって言えはいんだろう。歩けなくて、ちよつと認知が入つてきてて……ウチじゃもうどうにもならないから、施設で面倒見てもらつて。つていう。

多田 ……ごめんなさい、立ち入ったこと聞いて。

森山 別に、気にしないでください。それに、私もいつか、こうしなきゃなあつて正直思つてたんです。初めから私、暮会所やつて生活しようつて思つてたわけじゃないから。

多田 そうなんですか。

森山 そうなんです。元々私、会社勤めだったんですよ。精神的にアレになつちやつてやめちやつたんですけれど。緊急避難的に家に戻ってきただけだったから、いつかは戻らないと思つてはいて。先延ばし先延ばしにしちやつてたんですよ。

多田 ああ。

森山 派遣でもなんでも、ここでお客さん待つてるよりはお金入るし。まあまず、やれるだけやつてみようかなつて。

多田 ……なんか、こういうこと言うの無責任ですけど、森山さん、偉いですよね。

森山 え？

多田 だつて、自分だけじゃなくてお父さんのことまで考えて一人でやつて。今までだつてずつとそうじゃないですか。それつて、すごいことだと思う。

森山 ……そうかな。

多田 うん。

森山 別に、それしかなかっただけです。そうしようつて選んでしてるなら確かに偉いのかもしれないけど。何もしなかつたら、親捨てた感じになるじゃないですか。そういう、悪者になる勇気が私になかっただけで。自分のためですよ。全部。

多田 そういうもんですか？

森山 そういうもんです。

多田 そんな、ちゃんとそういうこと考える機会、ほかの人はあんまり来ないだけで。森山さんが酷い人とか、そういうことじゃないと思うけど。

森山 ……多田さん。

多田 はい？

森山 いや、やさしいですよ、つて。思つて。

多田 なんですかそれ。

森山 ちよつと、すごいなつて。

多田 氣つかつて言つたわけじゃないですよ。

森山 だと思ひますけれど。

多田 うん。

森山 励まそう、とか。そういうのつて。あ、言葉を採してるなつて分かるでしょ。頑張つてくれてるなつて。それが、ないですよ。

多田 思つたこと言つただけですし。

森山 今回の件も、すごい手伝つてくれてたし。今日だけじゃなくて。多田さん、すごいなあつて、思うじゃないですか。

多田 ……ありがとうございます。

森山 や、こつちがありがとうございます。今日まで、ほんとに。多田 ……。

ト、森山は頭を下げる。

多田は何も言えずに、その姿を見つめている。

森山は、その沈黙に氣が付く

森山 多田さん？

多田 初めてここに来た日の事、思い出すんですよ。時々。

森山 雪酷かつた日でしたよね。転んだつて言つてた。

多田 よく覚えてますね。

森山 だつて、あんなにズボン乾かしてる画、忘れないですよ。

多田 覚えてて欲しくなかつたな。それは。

森山 あの日、全然お客さん来なくて。ストーブの前に多田さ

んだだけで。だから、私が相手になろうって。

多田 ボロ負けでしたよね。大石取られて。

森山 死活になっただけで、結構互角でしたよ。

多田 負けて、本気で悔しくて。森山さんにちゃんと勝つのが目標になつて。それまで、なんとなく頑張つてたんですけど、ちゃんと頑張りたいって思うようになって。それは、囲碁だけじゃなくて。あんまり恰好悪いところ、頑張ってる人の前で、見せたくないなって。

森山 森山さんが居なかつたら、そういう僕はなかつたなって。ここ最近、最近だけじゃなくて、ずっと思ってたんです。

森山 ……。

多田 今日までにしたくないな。僕は。

ト、間。

森山 なんで、今なんですか。

多田 同じやないですよ。タイミング。

森山 ……はい。

多田 同じやないなって、思ってたんですけど。言えないまま、このまま終わりそうだったんで。すみません。

森山 ……私がこのまま終わらせようとしてたの、多田さん、気が付いてましたよね。

多田 はい。

森山 ひどくないですか？

多田 すみません。

森山 ……ひどいなあ。

多田 ……。

森山 お茶、飲みました？

多田 はい。

森山 入れます。

多田 すみません。

ト、森山は多田からカップを受け取る。
カウンターでお茶を入れながら

森山 ごめんなさい。

多田 ……。

森山 嬉しかったです。私も、多田さんの事、好きだったから。取り繕つてるとかじゃなくて。

お断りするの、多田さんが嫌とかそういう話じゃなくて、別の事です。

多田 どういうことですか？

森山 ……今、この状況で私が「はい」って言うのは、すごく卑怯じゃないですか。

多田 なんですか。

森山 今の私に返せるもの、ないし。

ト、森山はカップを多田に渡す。

森山 多田さんは、都合が良すぎるんです。今の私にとって。

対等でいたいんです。多田さんのことを私が尊敬して、多田さんも私の事をいいなって。そういう関係じゃなきゃ意味がなくて。でも、今の私は足手まといじゃないですか。そんなことないです。

多田 ないことないですよ。父の事もお金のことも。面倒なことばかり抱えて。性格最悪だし。多田さんに良いことが

なにもない。私の事、面倒になりますよ。

多田 なんでそんなこと、決めつけるんですか。

森山 私が、父に対してそうだったから。

多田 ……。

森山 いい思い出とか、あったと思うんです。囲碁とか教えてくれて、こうして仕事にできるくらいにはなって。そういうのがあったから、家に戻って一緒に暮らしてもいいかなって

思ってたんだと思うし。でも、なんか、昔の事もう、あんまり
思い出せないんですよ。今ここにいるのも、あの人の子供
だから以外の理由が思いつかなくて。

多田
……。

自分の親が今何歳なのか考えて。そんなこと、考えてる自
分最悪だなんて。毎日思うんですよ。そういうこと、平気
で頭に浮かべて、今も多田さんと会ってる。会ってたんで
す。付き合えないなんて思いながら、話したいとか、親を施
設に預けながら考えてたんです。ひどいでしょ。

多田
そんなことないです。

……多田さんはやさしいから。付き合ったら私の事、切り
捨てられないと思う。いつか愛想だけで笑うようになって。
多田さん笑うの上手いなあって思ってた生きていくの、嫌
だし。気が付かないふりをするのも嫌です。
そんな風に生きていくの、ひとりで生きていくよりずつ
と、みじめじゃないですか。だから。だからです。

ト、間

多田
別に、楽しいだけの人生送りたいなんて、思っていないです。
森山さんにいろんなことがあるの、僕だって分かってます。

森山
……。

多田
森山さん、完璧主義すぎますよ。

対等ってなんですか。対等じゃないって森山さんが自分の
こと勝手に低く見積もってるだけじゃないですか。

お父さんの事、辛いつて思ってたっていいじゃないですか。周
り巻き込んだっていいじゃないですか。誰も森山さんの事
悪く言いませんよ。森山さんが楽しく生きることを許し
てないの、この世で森山さんだけです。

森山
……でも、そういう私だったら。多田さん、私の事好きに
なつてくれましたか？

多田
は？

森山
私だって、多田さんに恰好悪いところ見せたくなくて、頑
張ってました。がっかりされなくなかったから。それで、やつ

と対等だったんです。私がここで、「はい」って言ったら、そ
の時点で一生対等じゃなくなります。

多田
森山さんだけの理屈じゃないですかそれは。

森山
私の理屈です。私の、私だけの理屈です。

多田
僕の理屈は混ざりませんか？

森山
混ぜられません。

多田
……。そうですか。

森山
すみません。

多田
……。

森山
本当に、ごめんなさい。

ト、間

多田
ずるいなあ、俺。

森山
なんで。

多田
焦ったんです。ずっとこういう時間が続いてほしくて。

ずっと森山さんと居たかったから、曖昧なまま何も言わ
ずにここまで来て。来たクセに、今更になつて会える理由
が必要だつて焦つて。関係に名前を付けないとつて。

森山さんが納得できないことを言っているって、すぐ分か
つたのに。折れてくれないかなつて追い詰めて。

ごめんなさい。謝るのは、僕です。

森山
……。

多田
いい加減な気持ちでは言っていないです。それだけは、信じ
てほしいけど。

森山
はい。

多田
でも、今じゃないですよ。

森山
……はい。今じゃないです。

ト、間

多田 一つだけ、お願いしても、いいですか。

森山 なんですか。

多田 今まで、それなりに。会えなくなつた人がいて、会う理由も話しかける理由もないのに。時々頭の中に出て来る人がいて。今何してるのかなって、仕事行く時とか、電車に揺られながら、思ったりするんです。もう多分、そういう人はずっとそのまま、分らないままなんですよね。怪我したり、落ち込んだりしても。

頭の中で、森山さん、今笑ってるのかなとか。楽しいことあるのかなとか。考えて、そのまま分らないのが一番、僕にとつて怖いことなんだな。思ってたんです。だから、今まで何聞いてたんだって、思うと思うんですけど。

また、打ってくれませんか。

森山 ……。

多田 森山さんが、会つてもいいなつて思つたときに。

森山 森山さんが頑張つてること、聞かせてください。

森山 ……待つてゐることですか。

多田 待つてゐるってより、…待つてゐるのかな？

森山 じゃあ、

多田 でも、待つてゐるだけです。全部、森山さんが納得いくまで、それだけです。

ト、間。

森山 ……いま、打ちませんか？

多田 え。

森山 もう一局。私が負けたら、またリベンジします。

多田 じゃあ、僕が負けたら、また挑戦してもいいですか。

森山 なんて、二人して、負ける話ばかりするんですか。

多田 だって、森山さんが。

森山 ……崩しますか。

多田 はい。

ト、碁盤に並んでいた石を崩す。
崩しながら。

森山 都合よすぎますね。多田さんも、私も。

多田 だめですかね。

森山 だめですね。

ト、二人は石を碁笥に入れきつて。

森山 待たなくていいですからね。私ただ、打つ約束しただけです。

多田 はい。

森山 でも、頑張れてたら。頑張つてゐる話、聞いてください。

多田 はい。

森山 頑張れそうな気がするんです。立ち止まっても、思い出して、また歩き出せそう。

ト、二人は碁笥に手を入れて。

多田 握りますか。

森山 はい。…私、黒だ。

多田 白番か。

森山 コミ。はい。

多田 はい。じゃあ。お願いします。

森山 お願いします。

ト、二人は打ち始める。

遠くから、電車の遮断機の音が聞こえる。
夜が更けて、石音だけが先へ続いていく。